



慶應義塾大学ビジネス・スクール

ピッグズ湾 (A)

5

引き継がれたキューバ問題

1960年初め、アイゼンハワー政権は、CIA（中央情報局）の指揮のもとに、ガテマラにいるキューバ人亡命者を訓練して開放軍にすることを許可した。同年の大統領選挙の少し前、この開放軍を、ゲリラ部隊ではなく、通常の戦闘部隊に編成することが決定され、装備も大幅に増やされた。

10

そして、この計画が、1961年から新しい大統領となったジョン・F・ケネディに、キューバ問題として引き継がれた。その計画に含まれていたのは、ガテマラでアメリカ人による訓練を受けていたキューバ人亡命者の一団、フロリダに逃れていたキューバ政治家たちの委員会、亡命者たちを故国へ侵入させる計画、それから、キューバの国土でその委員会を臨時政府として就任させる計画、などであった。

15

ケネディ大統領は、当選後、パームビーチの休養先で、CIAのアレン・ダレス長官と次官の訪問を受け、状況の説明を聞いた。ケネディは、その規模の大きさと大胆さに驚き、初めから深刻な疑惑を持った。

しかしCIAの担当者たちは、その計画を熱心に売り込んだ。そのうえ、この計画は今においては絶対に実行できない、とも言った。彼らの主張した理由は次の3つであった。

20

第1に、亡命者軍はもう十分に訓練をつみ、戦闘をしたくてムズムズしており、手綱を押さえないほどの士気になっていた。

25

本ケースは次の資料から引用しつつ高木晴夫によって1991年に作成された。

「ケネディ 栄光と苦悩の一千日」(原書名:A Thousand Days)

Arthur M. Schlesinger, Jr. 著 中屋健一訳 河出書房刊

「ロバート・ケネディ 13日間 キューバ・ミサイル危機回顧録」

(原書名:Thirteen Days; A Memoir of The Cuban Missile Crisis)

Robert Kennedy 著 毎日新聞社外報部訳 毎日新聞社刊

「ケネディの道」(原書名:Kennedy)

Theodore C. Sorensen 著 大前正臣訳 サイマル出版会刊

30

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送も、これを禁ずる。

第2に、ガテマラの訓練キャンプはしだいに目立つようになった。政治的にも物議をかもしているので、ガテマラ政府は閉鎖を求めており、ケネディ大統領としては彼らの行きたがっているキューバに送り出してやるか、米国に戻すか、どちらかに決めねばならない。米国に戻せば、ケネディの悪口を言いふらすであろう。

5 第3に、ソ連がまもなくカストロ軍を強化し、共産圏で訓練を受けたキューバ人飛行士がミグ操縦士として帰国するだろうし、すでに多数のミグ機の梱包がキューバに到着している。キューバ人自身にキューバを開放させるチャンスは今をおいてない。

最後にCIAの担当者は次のように説明した。米国が実際に侵入しなくても、亡命者軍を使うことによってカストロを打倒することができ、表面的には米国は不介入の原則を破らないですむ。10 自分で手を下す危険はなく、失敗の危険もほとんどない——と。アレン・ダレスの直接の言葉を引用すると、「私は、今こうやっているように、アイク（アイゼンハワー大統領）の机のそばに立って、ガテマラ作戦は絶対に成功します、と申し上げたのです。ケネディ大統領閣下、こんどの計画はあの作戦よりももっと成功の見込みがあります。」というものであった。（ダレスが言ったガテマラ作戦とは、1945年、ガテマラの左翼政権をCIAが打倒した作戦である。）

15 ケネディ大統領への説明に加えて、新政権の他の要人にも説明が行われた。ダレスCIA長官と統合参謀本部のレムニツァ将軍は、1月22日、すなわち就任式の2日後、ディーン・ラスク国務長官、ロバート・マクナマラ国防長官、ロバート・ケネディ司法長官などの新政府の主要なメンバーに、この計画を明らかにした。そこで、統合参謀本部を代表するレムニツァ将軍は、合衆国をまきぞえにする度合が最小限から最大限にいたるさまざまな方法のうち、どれをとるべきかという議論を繰り返そうとした。

6日後、ケネディ大統領は、この計画についての最初のホワイト・ハウス会議を招集した。長い間耳を傾けていたあとで、彼は、国防省に、CIAの軍事的な構想を厳重に監視するように命じ、米州機構を通じて、キューバを孤立させ牽制する計画を準備するように命じた。この間にも、CIAは、今までやってきたことをそのまま継続していく予定でいた。

25 統合参謀本部は、CIAのトリニダッド計画について1週間検討したあとで、初期の軍事的成功の可能性について有望な判定を下した。しかしながら、この統合参謀本部の計画は、特殊であいまいな資料にすぎなかった。ある点では、最終的な成功は島の内部からの大規模な反乱、または外部からのかなり大きな支援いかんによるだろう、と断定していた。かと思うとその後で、勝利のためのこれらの二者択一の条件にはもう触れないで、もし現在の計画が予定通りに実行されれば、最終的な勝利の可能性は十分にあると述べて、それを結論としていた。つまり、たとえこの30 計画がすぐには最終目的を達成することはできないとしても、カストロ体制の最終的な打倒には大きな貢献をすることになるだろう、というものであった。

1つか2つの条件が満たされれば、この計画は成功するだろうという意見と、とにかくこの計画は無条件に成功するのだという意見との間には、明らかに理論上の相違があった。この相違が、ただ感傷的なものから来ているのか、あるいは意識的にしろ無意識的にしろ、一度合衆国がこの計画に関係したからには、よもや失敗というようなことはないだろうという信念に由来しているものなのか、その点は誰にも分からない。しかし、この信念は、ガテマラにいる合衆国将校の頭の中だけでなく、亡命者自身の頭のなかにも浸透していた。また、統合参謀本部のうちの少なくとも何人かの心の中にも、この信念がひそんでいた。

アーサー・M・シュレジンジャー大統領特別補佐官は、2月上旬に、はじめてキューバ計画の話聞き、それについての覚え書を大統領に送った。彼がその覚え書で述べたことは、もしキューバ以外のすべての国を考慮に入れないならば、この侵攻計画は大いにありそうなことのように思えるが、西半球全体、世界全体に焦点を拡大すると、この計画の決定に対しては反論が強くなる、ということだった。とりわけ、「これはあなたにとって手始めの、劇的な外交政策となることでしょう。今世界中に高まっている新政府への非常に高い好意を、あなたは一挙に失うことになると思います。そして、数えきれないほど多くの人の心の中に、新しい政府への悪意に満ちたイメージを固定させてしまうことでしょう。」と述べた。

この覚書に対する大統領の反応は、かなり曖昧なものだった。かれはシュレジンジャーに言った。「いいかね、私は上陸の24時間前まで、計画を中止させる権利を保留している。その間に、私はそこから何らかの意味を引き出そうとしているのだ。まあ、もう少し様子を見ようじゃないか」

2月の下旬に、統合参謀本部はガテマラの基地に視察団を送った。3月初旬の新しい報告で、この視察団は、国外からの支援についてはふれず、勝利は戦線の後方に反カストロ運動を作り出す能力いかんにかかっていると規定した。つまり、統合参謀本部の見解からすると、キューバ国内のレジスタンス運動が、作戦の成功には必要不可欠な要素であった。たとえば、どんなによく訓練され、装備もゆきとどいた士気の高い1,000人の侵攻勢力であっても、カストロの20万にのぼる軍隊や義勇兵にうち勝つことが可能であるような他の方法——合衆国の介入ということ

別にすれば——は、彼らにはとうてい考えられなかった。

統合参謀本部に対して、大統領は次のように主張した。そのような公然たる一方的な介入は、米国の伝統にも米国の国際的義務にも反することであり、その結果は、カストロの存在よりも、西半球の自由にとって大きなマイナスになる。そのうえ米国の通常兵力はまだ強くなく、いま使える陸軍戦闘師団の半分をキューバ山中のゲリラ戦に釘付けにすれば、共産側はベルリンかどこかに出てくるに違いない。そのような介入が必要となってくるからには、大統領としては絶対にキューバ上陸作戦を承認できない——というのであった。

情勢の展開は速度を早めていた。速成部隊を自分の農園にかくまってきたガテマラの大農場主が、ケネディ大統領へあてたイディゴラス大統領の手紙をたずさえて、3月のはじめにワシントンに到着した。イディゴラスはその手紙のなかで、ガテマラ内のキューバ人の存在によって自分の立場はますます困難になりつつあり、4月の末までにはなんとしても国外へ退去することを保証してもらわなければ困ると述べていた。一方、CIAも、キューバ人自身が早く移動を始めようと騒ぎたてており、速成部隊の士気は頂点に達しているから、これ以上の延期はせっかく高まった士気を挫く恐れがあると報告した。その上、やがて雨期が始まろうとしていた。CIAからの情報によれば、カストロは、チェコスロバキアで特別の訓練を受けたキューバ人の操縦士と一緒に、ソ連からジェット機を受け取ろうとしていた。もし、純粋にキューバ人だけの侵攻が実施されるものとすれば、それは数週間以内に起こらなければならなかった。3月のなかばには、大統領は、今すぐ実行するか、それとも中止するかという選択に直面していた。

閣議室でのキューバ問題

事態は今や明らかに激動していた。侵攻を執行すべきかどうかについての最終的な決定はまだ下されていなかったし、またもし決定されたとしても、トリニダッドを上陸地点とすべきかどうかについても、まだ結論は下されていなかった。実際の侵攻行動の検討は、この計画の創始者であるアレン・ダレスとリチャード・M・ビッセル2世の2人に委ねられていた。

ダレスは、長年情報関係の仕事に従事してきた結果、たしかに彼の中には非情な精神ができていた。しかし彼は、上品で、礼儀正しく、尊敬に値する人物であり、彼の兄に見られた知的な堅さや個人的な独善などは、ほとんど認められなかった。マッカーシー旋風の時代に、ジョン・フォスター・ダレスが罪のない國務省の役員を次々と狼たちに与えていた時でも、アレン・ダレスの方は、CIAの役人たちが不当にも議会で告発されるのを、次々と防いでいた。

ビッセルも、高潔な人格と際立って知的な才能に恵まれていた。彼の心は敏感でまた鋭く、明快な分析と流暢な解説という卓越した才能を持っていた。数年前に、彼はソ連上空を飛ぶU2型機の計画を創案し、その実現のために努力を重ねた。この時とまったく同じ熱意を持って、彼はキューバ計画にこの1年間打ち込んできた。会議でのビッセルは、手に鞭を持ち、その進行がどんな風に展開するかを説明し、選ぶべき上陸地点を比較して、それぞれの長所について解説するのだった。

ダレスもビッセルも、前政府の中で作られてきた提案の優れた点について、新政府を説得しなければならなかった。それは、2人とも長い間みずから打ち込んできた提案であり、彼らの代表する組織はその提案の中に重要な既得権益を持っていた。従って、彼らは計画の分析よりも、む

しろ弁護士としての役割を果たすことになった。

3月11日に、閣議室で会議が招集された。テーブルのまわりには、ラスク國務長官、マクナマラ国防長官、ダレス CIA 長官、まぶしいほどの勲章をつけた制服の3人の統合参謀本部長、米州担当國務次官補、ラテン・アメリカ特別研究班議長、それにしかるべきアシスタントや下働きの人たちが着席していた。シュレジンジャー大統領特別補佐官は、テーブルの一番端の椅子に腰をおろし、だまって耳を傾けていた。

その会議で、ダレスは次のように言った。「我々が抱えているのは、どうにでも処置できる問題ではない、ということをおぼえてはならない。もし、ガテマラのキューバ人を引き揚げさせなければならぬとしたら、連れてくる先は合衆国しかない。しかし彼らが、ガテマラでやっていたことをこの国でだれかれなしに吹聴して回るのを、黙って見ているわけにはいかない。“この宝物”をもしキューバに送り込まないとしたら、一体それをどう処理すればよいのか。合衆国への移住が不可能だとしても、その場所で解体すれば、もっと大きな困難を引き起こすことになるだろう。キューバ人たちは、何が何でも故国へ帰るつもりでいるから、武装解除には当然猛烈な抵抗を示すだろう。その上、仮に速成部隊の解散に成功したら、そのメンバーは失望し、怒りに満ちて、ラテン・アメリカ全土に散っていくだろう。彼らはそれまでどこにいて、何をしていたかを話して、CIAの秘密をあばいて回るだろう。そして彼らは、反カストロ遠征軍を準備した合衆国がおじけづいて計画を中止した、と宣伝して回るだろう。この結果、ワシントンでは信用を失い、ラテン・アメリカにおけるカストロの敵を落胆させ、ベネズエラでのベタンクールの例のように、民主主義体制へのカストロ主義者の攻撃を助長させるのは目に見えている」とダレスは強調し続けた。さらに彼は「こうして、侵攻軍の解体はカリブ海全域にカストロ革命勢力を生むことになるだろう。だからこそ、キューバ人の速成部隊を解体するのではなく、“彼ら自身の力”でキューバへ帰らせる方法を何か考えてやらなければならない。」と主張した。

偶然の出来事は、こうして現実の姿をとることになった。そもそもは任意のものとして速成部隊を作ったCIAだったが、今や不可欠の手段として、反キューバ運動にそれを使用しようと主張した。こういう意見に直面したケネディ大統領は、結局、最も簡単なのは、キューバ人たちを
行きたい所へ——すなわちキューバへ——行かせることかもしれないということに、暫定的に賛成した。それからケネディは、最小限の政治的危険で、それを行う方法の研究に会議のテーマを
きりかえようとした。そのためにはまず第一に、もっと進歩的で代表的な亡命者の組織を形成することが必要であるとして、大統領は、なるべく早くそれを実現させるよう指示を与えた。

この時ビッセルは、再びトリニダード計画をむし返した。ケネディは、「あまりにも目立ちやすい」と、疑問を投げかけた。彼は第2次大戦流の大規模な水陸両面からの侵攻には気が進まなかった。彼は「ひっそりとした」上陸、それもなるべくなら夜間の上陸を望んでいた。そ

して彼は、「合衆国軍隊は介入しない」という基本方針で計画をたてなければならないと主張した。この方針に対しては、出席者のだれも反対しなかった。

5 国務省のトーマス・マンもこの趣旨に賛成して、もしアメリカの手が隠されないようなことがあると、ラテン・アメリカや国連で反アメリカ的な反応を引き起こす可能性があることを強調した。特に、空軍勢力がキューバ国内のどこかの基地から飛び立ったように見せかけることができないと、たちまち正体が暴露してしまうと心配した。

10 大統領はいつもの歯切れの良さで問題点を明らかにして、会議の締めくくりをつけた。彼はこう言った。「作戦に伴う困難を考えた場合、政治上の危険が少なければ少ないほど、軍事上の危険は大きいという点にあり、その逆もまた、しかりである。問題は、この2つの危険がうまく釣り合うようにできるかどうかを前もって見極めなければならないことだ」と。

引き続き3日間、CIAの企画者たちは、どの上陸地点を選ぶべきかを研究し、3つの新しい候補地を選んだ。そのうち最も可能性のあるのはトリニダッドの西方約100マイルにあるコチノス湾、つまりピッグズ湾周辺のサパタ地区、であると結論した。

15 統合参謀本部は、3月14日にこれら候補地を検討した後で、サパタ地区には仮設の飛行機場もあり、沼沢地帯が自然の防壁となっているので、3つのうちでは一番良いと思うが、依然として今でもトリニダッドの方をとりたいと思っていると、穏やかに付け加えた。

20 3月15日に閣議室で再び会議が行われた時、ビッセルはサパタ計画の概要を説明した。大統領は暗い顔をして聞きながら、多少の修正を提案した。しかし、それは大抵「あまり大騒ぎにならないように」するためのもの、たとえば、海からの攻撃軍が夜明け前には上陸を終わっているようにする、といったようなことであった。それから彼は、侵攻が実際に行われるという想定に基づいて、CIAが行動することを認めた。しかし彼は、合衆国軍隊の介入はどんな形にせよ反対だという自分の決心を繰り返し、なおこの計画それ自身についての彼の最終的な決定はまだ保留しておくことを、注意深く、そしてはっきりと付け加えた。そして遠征軍を、少なくとも攻撃開始予定日24時間前までは、大統領の命令でそれを中止させることができるような状態に留めておかなければならない、と彼は言った。

ホワイト・ハウスの人たちは、皆が、作戦の成功のためには、後方に反乱が起こることが絶対に必要だと考えていた。その点については、統合参謀本部もまったく同意見だったし、CIAもおそらくそうだろうと思われた。

30 しかし、CIAの計画のそもそもの考え方は、侵攻は反乱によってよりも、むしろ消耗戦によって勝利を占めるだろうというものだった。つまり、上陸と同時に、侵攻が、武装も組織もない人々を反カストロの反乱に駆り立てるだろうとは、明らかに期待していなかった。しかし侵攻計画は、広範囲な上陸地点の占領が、キューバのレジスタンス運動に従っている武装されたメンバー

の組織された反乱をただちに触発するだろう、という仮定に基づく考え方になっていた。

特にダレスとビッセルは、こういう考え方を強く持っていた。4月上旬に、内部のレジスタンス運動の見通しについて質問された時、それまで少なく見積もっていたものを改めた。代わりに彼らは、2,500人以上の人たちが現在レジスタンスの組織に入っており、そのほか2万人のシンパサイザーがいるし、速成部隊がいったん島にとりついてしまえば、どう少なく見積もっても、キューバ人民の4分の1の積極的な支持を期待することができる、と主張した。彼らはさらに、空からの武器補給を希望しているキューバ関係筋からの懇請や、合図が与えられれば、名前まで登録した多数の人々が立ち上がる準備をしているという確証をあげて、それらの楽観的な予想を裏書きした。

しかし一方、CIAの情報課では、キューバ人の遠征軍については正式に何の通知も受けていなかった。そのため、侵攻が他の反乱の引き金となるかどうかという問題に対して、まったく考慮が払われていなかった。情報担当の有能な長官代理であるロバート・エイモリイ2世にも、作戦のどんな局面についての情報も、事前にまったく知らされていなかった。

国務省でも、トーマス・マン以下の人間は、だれもこの計画を知らされていなかった。つまり、キューバ島から毎日情報を受け取っていたキューバ担当でさえ、侵攻計画の成功の可能性について意見を求められたことはなかったのである。

シュレジンジャー大統領特別補佐官は、ジョゼフ・ニューマン（キューバに特派されて連載記事を書いたニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙記者）と話し合った結果、CIAの見通しについて疑惑を深めた。ニューマンはこう言った。「反カストロ感情は、昨年以来、著しく高まって来てはいるが、カストロは依然として熱狂的な興奮と信頼をかきたてている。若い人たちの間や、革命による社会的変化から利益を得た人々の間では、特にそういう傾向がみられる。これら2つのグループは、全人口の内、かなりの比率を占めている。」と言った。現在はカストロに幻滅を感じているかなり多くの中間層も、合衆国によって支援される侵攻作戦を熱狂的に迎えるということは、まずあり得ないだろう、というのがニューマンの考え方であった。なぜなら、彼らから見れば、結局合衆国もバティスタの同類でしかなかった。いかに大勢のキューバ人が現在の状態に不満であったとしても、彼らはやはり旧体制に戻るより、むしろ現状の方を喜んだのである。「カストロ反対のキューバ人をも含めた、多くのキューバ人の目から見れば、ひどく汚らしい人たちと手を握り合うのだということを、我々はよく理解しなければならない。」とニューマンは言った。

切迫した最終決定

閣議室での会合は、その頃には3日か4日毎に必ず開かれ、大統領は、厳しい質問を次々に行うようになっていた。そして、この計画のいろいろな問題点を明らかにしてゆくにつれて、彼は
5 ますます懐疑的になっているようだった。

その上、ラオスの情勢も極めて切迫していた。もし、キューバへの侵攻が始まると、ラオス問題に関してソ連と協定を結ぶ機会が失われるかもしれない、とケネディは心配していた。モスクワからのトンプソン大使の電文は、フルシチョフがキューバに並々ならぬ関心を寄せていることを知らせてきた。その一方、地球の反対側で共産主義と戦うためにアメリカの軍隊をラオスへ送
10 らなければならないとしたら、フロリダから90マイルしか離れていない共産主義を無視することはできなかった。ラオスとキューバとは一方が他方にどんな影響を与えているかは分からないにしても、お互いに結びついていた。

ダレスとビッセルは、もしガテマラのキューバ人がカストロ打倒のために出動するとしたら、今こそ好機であり、彼らがその使命を達するのは間違いないと信じていた。その上、彼らは遠征
15 中止論に悩まされていたので、今や、努力を倍にして説得に努めていた。ダレスはケネディに向かって、ガテマラの場合よりも、はるかに成功の確信は強いと語った。CIAは、たとえその遠征軍が失敗したとしても、損失はそうひどく高くつくものではないということを示そうとして、特に努力を集中していた。

もちろん、新聞は毎日のようにマイアミでの兵員補充を報じており、世論は、この冒険が合衆
20 国のせいにはされないだろうという楽観論を信じていなかった。しかし閣議室では、合衆国の兵士たちが実際の戦闘に参加しない限り、さほど大問題にはならないという考えが、ある程度支配的だった。もし、その作戦が本当に「キューバ人だけの手で」行われるとすれば、世論は、キューバ人もカリブ海諸国につきものの革命-反革命というおきまりのコースを辿りつつある、というふうになるであろう、と考えられていた。

その上、ダレスとビッセルはなお続けて、情勢がどんどん悪化して侵入者たちが海岸で打ち負
25 かされたとしても、彼らは容易にエスカムプレイ山脈の中に「姿を消して」しまうことができるのだと言った。確かに、トリニダッドの場合は地理的にエスカムプレイ山脈の麓近くにある町なのだから、確かに、そういうことが言えたかもしれない。しかし、簡単な逃げ道があるとする場合のCIAの説明は、率直な話し方と言うには程遠かった。エスカムプレイ山脈が沼沢地とジャ
30 ングルの入り組んだ絶望的な広がりを経て、ピッグズ湾から80マイルも離れた所にあるということは、十分に認識されていたとは言い難い。そしてガテマラに派遣されていたCIAのメンバーたちは、山の中に逃げ込むという最後の手段についてキューバ人に何も話していなかった。

彼らの計画は、米軍の公然たる参加を前提としているかのように推し進められていた。しかし、大統領が具体的に質問すると、そんなことはないと答えるのだった。すなわち、大統領が「亡命者は米軍が参加しなくても目標を達成できるだろうか。彼らは、米軍が参加しなくても作戦を執行したがつているのか。作戦が失敗しても米軍は介入しなくてよいのか。」と下問すると、「大丈夫です。」と答えるのであった。

いずれにせよ、このような保証の結果、大統領は4月12日の記者会見で次のように述べ、米国は直接介入しないと約束した。「いかなる情勢のもとにも、米国軍隊がキューバでどのような介入も行うことはない。キューバ国内のどのような戦争にもアメリカ人を関係させないよう、政府は全力を尽くすつもりであり、政府がその責任を果たし得ると思う。キューバにおける根本的問題は、米国・キューバ間にあるのではなく、キューバ国民自身の間にあるのである。私はその原則が厳守されるようにしたい。政府の態度は米国内の反カストロ・キューバ避難民にもよく理解され、共感されている。」

閣議室での会議は、外見上だけでの意見の一致と言う奇妙な雰囲気の中で続行されていた。CIAの代表者たちが、討論の主導権を握っていた。統合参謀本部長も、満足してそれに追随しているように見えた。CIAと統合参謀本部は、ピッグズ湾計画が実現するまでに、その計画の再検討をめぐって、3月15日以降4度目の合同会議を開いていた。

ロバート・マクナマラ国防長官は、ペンタゴンの支配権を掌握する仕事に打ち込んでいたために、この計画の軍事的局面についての参謀本部長の判断を受け入れていた。この侵攻がたちまち反カストロの反乱を呼び起こすだろうというCIAの言葉を理解して、とにかく新政府は、先任者が十分に検討しておいた政策に従っているのだと、彼は考えた。

ディーン・ラスク国務長官は、押し量り難い態度で議論に耳を傾けていたが、行き過ぎにならないようにと、穏やかな警告を発しただけであった。彼が3月下旬にSEATOの協議会に出席して不在だったため、長官代理として会議に出席したチェスター・ボールズは、そこで話されることを聞いて唾然とした。しかし、長官の不在中なので発言することをためらった。3月31日に、彼は侵攻計画に反対する強硬な覚書をラスクに渡し、もしラスクは不賛成ならば、それを大統領に直接手渡したいと許可を求めた。ラスクは、計画はゲリラ戦の規模まで縮小されているのだという印象を与えてボールズを安心させ、結局、彼の覚書を無視してしまった。

この間にフルブライト上院議員は、侵攻を予言する新聞記事を見て、次第に懸念を深めていた。大統領は復活祭の週末をパームビーチで過ごす計画であったが、フルブライトもまた、フロリダへ行く予定なのを知って、自分の飛行機に同乗するようにフルブライトを誘った。フルブライトは、外交委員会の一員であるパット・ホルトの助けを借りて、一通の覚書を作り、翌日それをケネディに手渡した。

キューバに対して、2つの政策が考えられる、とフルブライトは論じた。即ち、打倒か、それとも寛容と隔離の政策か、であった。最初の方は、「米州機構憲章の精神と、おそらくはその条文にも背くことになるだろうし、多くの西半球条約や合衆国自身の法律にも背くことになるだろう。もし成功しても、リオ・グランデからパタゴニア地方に至るラテン・アメリカ全域から、帝国主義の実例として非難を浴びることになるだろう。それは、国連でも問題を引き起こすだろう。さらにまた、カストロ後のキューバ政治を成功させなければならないという重大な責任を我々に課することになるだろう。反対に、もし失敗しそうになったら、我々は自国の軍隊を投入したいという誘惑にかられるかもしれない。しかし、そんなことをしたら、たとえ合法であるという見え透いた口実を用いたところで、早すぎた介入についての汚名をそそぐために、30年間は努力しなければならぬだろう。この活動に、たとえ暗黙の支持でも与えるということは、合衆国が国連内部やその他の場所で、絶えずソ連を非難していたのとまったく同じような偽善とシニシズムを、自ら行うことに他ならない。これは、全世界の立場から、あるいはアメリカ自身の良心の立場からも、言えることである。」

代わりにフルブライトは、封じ込め政策を進めた。「進歩のための同盟は、カストロを西半球の他の国から孤立させる堅固な基盤として利用できる。キューバの亡命者たちについていえば、もっと想像力に富んだ働きかけによって、彼らの能力を祖国侵攻などよりもっと生産的な使い方に向けることも可能だろう。」フルブライトは次のように覚書を締めくくった。「カストロ体制は、肉に突き刺さったトゲではあるが、心臓に突き刺さった短剣ではないこと、決して忘れてはいけない。」

大統領は、パームビーチから帰ってきた時に、フルブライトに特に依頼して、4月4日の重大会議に出席するように求めた。この会議は、國務省のラスクの部屋のすぐ隣の、小さな会議室で開かれた。いつものきまりきった手順——CIAによる説得の巧みな解説、ラスクの極穏やかな否認、大統領の鋭い質問、——を経た後、ケネディはテーブルのまわりの人たちに、それぞれの考えを尋ね始めた。フルブライトは、力強い、懐疑的な態度で、この計画全体を否定した。「この作戦は、カストロの脅威に比べて、あまりにも不釣り合いなほど大げさすぎる。それによって、アメリカの全世界に対する道徳的立場は危機に瀕し、アメリカは今後、共産主義者たちに条約違反に抗議を申し込むこともできなくなるだろう。」古風なアメリカ人らしい彼の話しぶりは、条理を極めていて、しかも力強いものであった。ケネディ大統領とシュレジンジャー特別補佐官は感銘を受けた様子であったが、他の人々の表情に変化はなかった。

ケネディは、引き続き列席者の意見を聞いた。マクナマラは、その作戦を支持すると述べた。マンは、初めの頃はそれに反対したい気持ちが強かったが事ここに至った今となつてはあくまで実行に移すべきである、と述べた。ラテン・アメリカ研究班のバーリは、キューバ侵攻を望んで

はいるが、あまり大げさな方法はとりたくない、と語った。ケネディはここでも再び、海岸で一大攻撃を開始するやり方に反対して、ひそかに浸透していくにはどんな方法が考えられるかを知りたがった。出席者全員の意見を尋ね終わらないうちに、その点に関する議論が始まってしまい、まもなく、会議は解散した。

反対を述べたフルブライトはそれ以上意見を述べず、彼の意見に肯定的な様子を示したシュレジンジャーは、2、3の控え目な質問をただけで、多くは沈黙のままであった。

大学教授から大統領特別補佐官になったシュレジンジャーにとって、政府の内情はまだ明るくなかった。個人的に大統領と自由な話し合いをするのと、それぞれの機構の権威を背負った国務長官、国防長官、それに統合参謀本部長などの意見に公の席で自分独自の判断をぶつけるのとは、まったく別の問題であった。その上、侵攻計画の擁護者たちは、修辞上の利点を持っていた。彼らはすこぶる男性的なポーズで、砲撃能力や、空軍の攻撃、上陸用舟艇など、具体的なものについて話を進めることができた。一方、シュレジンジャーの方は、この計画に反対するために、極めて抽象的なもの、つまり合衆国の道徳上の立場、大統領の名声、国連諸国の反応、世界の世論、その他諸々の抽象概念を用いねばならなかった。

大統領の決断

4月7日の翌朝、ディック・グッドウィンとアーサー・シュレジンジャーの2人の大統領特別補佐官は、ホワイト・ハウスの朝食で顔を合わせ、もう一度方向を逆戻りさせようとすることに意味があるかどうかを検討した。グッドウィンはキューバ問題の会議に出席したことはなかったが、この2人は絶えずその問題について話し合っていた。その日の午後遅く、ラテン・アメリカでの経済会議に出席する前に、グッドウィンはラスク国務長官に会いに出かけた。グッドウィンがキューバの作戦についての強い疑念を表明した時、ついにラスクは「多分私たちは、この問題についてノーと言えない立場にあるという事実の上で、空売りされていたのかもしれない。」と言った。その後グッドウィンは、シュレジンジャーに対して助言し、まず大統領に宛てた覚書の写しをラスクに送っておいてから彼に会う方がよいと言った。シュレジンジャーはその翌朝、ラスクに会う約束を取り決めた。

ラスク国務長官にシュレジンジャーが会って疑念を打ち明けると、彼は、幾分悲しそうな顔をしながら静かに聞いていた。終わりに彼は、この問題についての損益表をいつか作成したいと思っていたので、この週末にそれを仕上げ、月曜日には大統領に会うように努力してみようと言った。彼は、いつかの会議で統合参謀本部を驚かせたある提案を、もう一度振り返っていたのであった。それは、失敗した場合には基地まで退却するという想定のもとに、作戦をグァンタナモから

扇形に広げようとするものであった。更に彼は次のような意見を述べた。「国防総省の人たちを観察していると、なかなか面白い。彼らは大統領の頭を断頭台の上に置くことにはまったく躊躇しないくせに、グァンタナモを危険にさらすかもしれないこととなると、全然考えようもしないんだ。」

5 グッドウィンが帰りがけに挨拶をしようとして立ち寄ると、ケネディは芝生に面したフランス窓の方へ大股で歩いていた。彼は、グッドウィンの火のように激しかった選挙演説を思い出して、やや皮肉な調子で、「やあ、ディック、君のキューバ政策をこれから実行に移そうとしているところなんだよ。」と言った。

10 その同じ日の午後遅く、シュレジンジャーも大統領に会ったが、その時の大統領はすでに決断した様子であった。そして彼はこう付け加えた。「もし私たちが、これら 1,000 人のキューバ人を何とかしなければいけないのなら、合衆国の中で処置するよりもキューバへ送り込む方がずっといいと思う。特に、そこが彼らの行きたいと望んでいる所であればなおさらだ。もし米国が手を下さないで、キューバ人自身で新政権樹立を宣言し、国民を結集し、カストロを追い出せば、中南米全体が枕を高くして眠れるだろう。たとえ山中に逃げ込み、そこでゲリラ戦をやることになっても、それだけでもプラスになる。」

15 大統領は、大規模な水陸両面からの侵入から、大衆蜂起へと規模を縮小するのに成功したと感じたのである。逃げ道についての CIA の保証を受け入れた彼は、失敗した場合の軍事的および政治的な損失は、今や我慢できる程度までに減少したと考えていた。

20 計画実施の 1 週間前に、大統領は、最終許可を下した。それには、統合参謀本部を代表したレムニッツァ將軍とパーク提督の保証文書と、ラスク國務長官とマクナマラ国防長官の口頭による同意が付加されていた。

 ケネディは、カストロが米国に直接脅威を与えるとはみていなかったが、キューバ亡命人からカストロを“保護”する理由も見当たらなかった。この段階において計画をご破算にすれば、カストロが民意に基づいて治めていることを認めたとして解釈されることも心配した。

25 また、計画を拒否すれば彼の全般的な姿勢と矛盾する弱さを見せつけることになりはしないかとも感じた。この要因は、疑いもなく彼に影響を及ぼしていた。それは、彼の自分自身の幸運に対する途方もない確信であった。1956 年以来、すべてが彼の思い通りに展開してきた。記録にあらわれたあらゆる不利に打ち勝って、指名大会でも大統領選挙でも勝利を握った。彼のまわりのすべての人々は、彼は何をやっても失敗することはないのだと信じ込んでいた。

30 その翌週の火曜日、ロバート・ケネディ一家はロバートの妻エセルの誕生日を祝うパーティーを開いた。お客や、寸劇や、子供たちや犬までも一杯に溢れ、大掛かりで陽気な、喧噪に満ちた会だった。お祭り騒ぎの最中に、ロバート・ケネディは、シュレジンジャーをわきへ連れ出して

言った。「今度の事に、あなたはあまり賛成じゃないようですね。」彼はその理由を尋ね、シュレジンジャーがその理由を説明するのを表情も変えずに聞いていた。やがて、彼は言った。「あなたの考えは正しいかもしれないし、間違っているかもしれない。しかし、大統領は既に決心しました。今は、すべての人が全力を挙げて彼を助けなければいけない時なのです。」

5

10

15

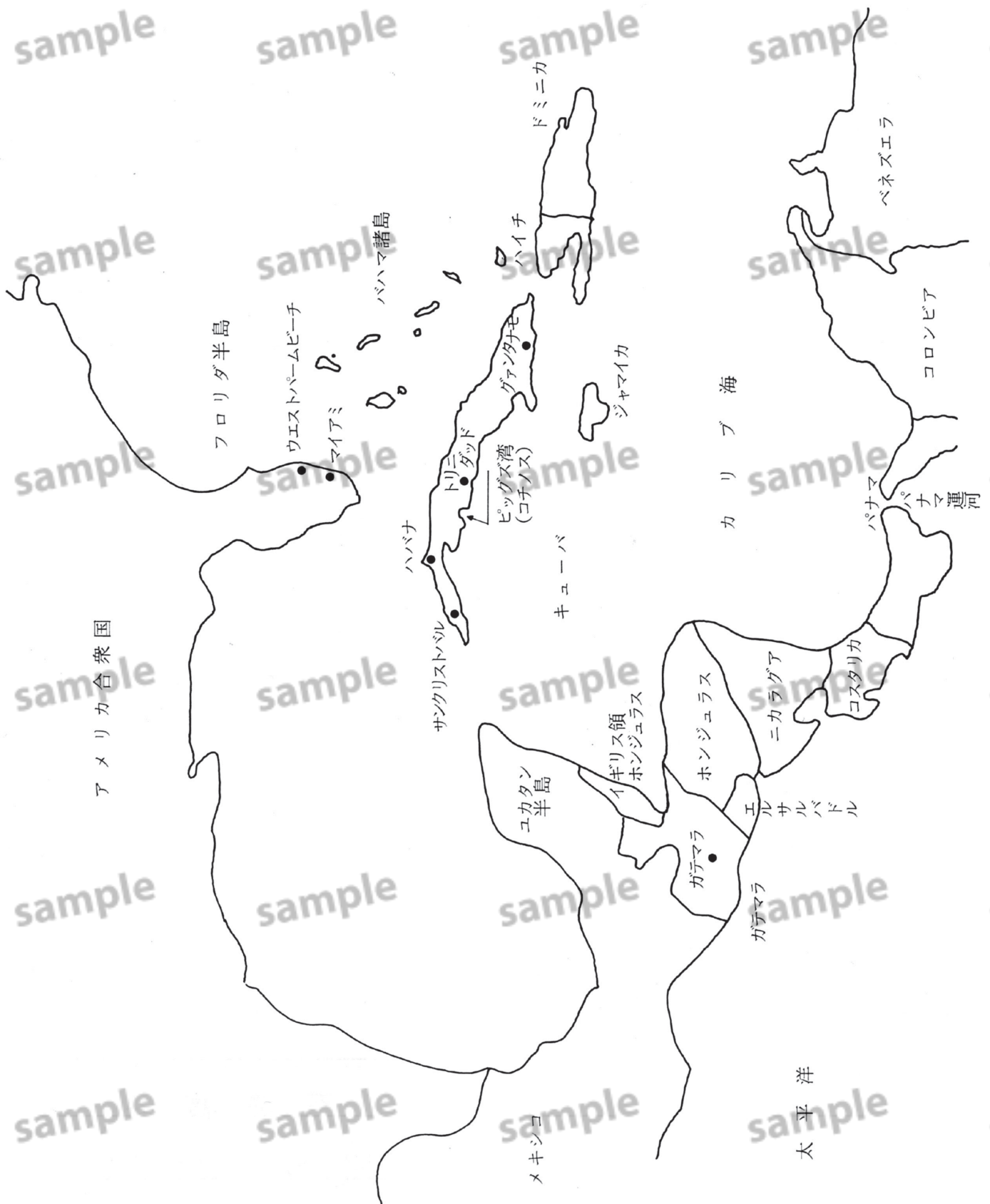
20

25

30

附属資料1 ピッグズ湾

キューバ島の地図



sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

不 許 複 製

慶應義塾大学ビジネス・スクール